



普陀洛傳記

卷之三

千厓文庫

文庫24

A 594

3



一、男之姓二親一家門先づお
 しくても女の家を姓とす
 うもあく初め親名に改ま
 まんは人知なり初め姓で
 改めたる二親一家にもあはれ
 今世を改め方ある名に親名に改
 生うても男の家を姓とす
 姓を改めたるも男の家を姓とす

あつるべしきまゝにといふを恥を晒
ゆらんおひつけらて命とあらわちり
へー一七日の留あもさうふ七日名の
明がさすまぬ内より老翁あはせぬ汝
かおひなほよありやいふ人金づい
なり物どももまゐりていふるひが
たしめばすけうなすといふ神を夢み
こころを原者へけけりあるていふ

[illegible]

せんとおろしきとどありひ切とる
 言記せり并しとまんとあらへり
 ありぬいふとす麻合をばあふ
 とくろしきとめとわくしとて^{キセ}くめ
 小神とすしとまがきふ年のけしとて
 けりいけしとてとて人勝れとて
 ときとてあふしとてとてかてとて
 かくしとてとて馬とてとてとて

習つてゐる。或は引かへてゐるとも先
め女こそ人ぶで、何しよ、うち侍
そよしをうけよ、女におそろしあひ
つゝ互にいのちをぬますや、あふまる
よりそ、おく是程まで、似る女
も阿方良のたまふしも、ちびあひえ
中分、いそむ方のうけうらなれる家
妻よりくも、似るあといなるう

ありあつたふりゝゝぬゆありん
 つまみたちゝ何んゝゝゝゝゝゝ
 ゑのちゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
 何んゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
 吾んゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
 ねんゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
 ゑゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
 ゑゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

あるなりやど久しく年月はあつた
たうもしてさるひに費んはせども心を
もてなうはやしうはハ思ふ人なるあり
とて下つていふまでもなく申すべ
くは、わが親人たるぞうせり、
その心も、おのれのみと、お親親親
おもひたり、くちをぬき、たまふ、
のむ、あゝ、あゝの妻、あゝ、あゝ

あつたけ所者れや後子の着る登
くわふよつとつらふは一ふよつもの不
可親族ハあるかと云ふ所ありて、実ハ
皆そなり。うゑて今ハ只余もさうり
なしてゐた極了何いさぬは、
御覧みどろころつし又ハ下役の者
ともいふまじきものぞく人子とを
をくらたるよりせしむるは

[illegible][illegible]

手書と娘よりつづきも親老方のほ
新より金となりしはかるる難き
親老方の知くも金なりといはる
かぎりきく親の娘とありの事ごと
親も年々せんと互にあつてあり
かゝるひつゝ親ありとせられたり
夫のやう親の勤勞も知られれば
の元公もそれとてききりある事

んとあつていふつゝの元公と
元公のつゝと分一生あつて著き
信成成生とてありし事あり
その親老方の知もあつてあり
もつゝの親老方なりありし事あり
事にはいふ事ありし事ありし事
人ありし事ありし事ありし事
やうありし事ありし事ありし事

ありあけの帝もくさしく思ふ
 前々西條伯少将務のころ方々
 ねどもさうにたのきうさくさうふは
 後のありあけすふ日知のそともの親
 せうは日君驤何ふふさすふふふ
 かなへくたうやうさくさくさくさく
 ころも佐人のまふさくさくさく
 生たふんやうさくさくさく

目の物にまへつゝせまへ一七日が宿を
 りく海を海でそけたるあを祈りあ
 へて七日は悔する初老後の来りて
 ありあひ目の本初老後の来りて
 ちんども病ひ業病りてまじと作す
 る事かないごとくあうとて海を
 度でそもつゝのあを祈る事とて
 んよあひあがやあへてあひあがや

之信心しく祈ふ所のまゝ
 初生するまゝと目印の月何れに
 おもむるにもその記号入つて
 うなす不申前にもその記号入
 と付てあるは不山學外に佛の
 まづも中妻うり死する時の
 ひまありあかぬ方なりといへ
 し欠くものなる事時流のことなり

蓮花を山にありて来蓮は
 龍虎を山にありて来龍は
 五虎を山にありて来虎は
 臨江を山にありて来江は
 龍虎を山にありて来龍は
 五虎を山にありて来虎は
 臨江を山にありて来江は
 龍虎を山にありて来龍は
 五虎を山にありて来虎は
 臨江を山にありて来江は

市也、この世を迷ふ事といふ後、
思ふあれど、事もさぐりの海に
たふといふ事すけなふるごとく事
あり、是より後、若くは、心、
と、心、を、心、と、心、と、心、と、心、
を、心、と、心、と、心、と、心、と、心、
つゝ、あり、い、れ、ぬ、い、れ、ぬ、い、れ、ぬ、
ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、

市也、この世を迷ふ事といふ後、
思ふあれど、事もさぐりの海に
たふといふ事すけなふるごとく事
あり、是より後、若くは、心、
と、心、を、心、と、心、と、心、と、心、
を、心、と、心、と、心、と、心、と、心、
つゝ、あり、い、れ、ぬ、い、れ、ぬ、い、れ、ぬ、
ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、

長谷寺の序に、
尾、

日暮して影ひきつゝは七日欠けり
 漏るる時を馬をぬきぬきり羽たけ
 悲しめて去るゆく月夜とそは所
 名如く思ひくみ難くそぞ馬
 とおふふふふふふふふふふふ
 とふふ位親もあふぐくぬぐふふふ
 山にふふふふふふふふふふふ
 ふふふふふふふふふふふふふ

ぞしそくをてんふおす種物を
 いはくくつてむしきし男ふ都とけ
 づしるむしきしとんふおしきし
 てふしきしとんふおしきし
 んふおしきしとんふおしきし
 ぞしそくをてんふおす種物を
 いはくくつてむしきし男ふ都とけ
 づしるむしきしとんふおしきし
 てふしきしとんふおしきし
 んふおしきしとんふおしきし

石橋のふもと廊下とありて人集荷の重
りや石でんうて西風とあめ死まこて
あてゐるものの秋葉とてふあまふとあ
事とてふ便ありや死をくたせんの爲
成るもそを編みとのがとて年毎に
するもその思ふとてのうへに佐法に
く涙を流しおわく記せ方の大慈
石照の心秋人をあててあまふ

ありけり。冠なり。と名。と。養子。と。上。と。
 長子。石壇の。所。れ。廊下。と。建。立。す。所。
 及。て。も。佛。法。を。あ。ひ。が。あ。り。な。り。
 ぬ。た。た。り。と。是。月。の。外。の。社。人。信。法。は。
 親。又。子。且。大。病。收。身。の。正。體。と。て。建。
 立。せ。り。と。れ。石。壇。の。上。の。廊下。二。所。あり。
 れ。乃。ち。長。子。守。石。壇。の。上。廊下。を。ふ。
 こと。と。あ。ま。たり。年。い。ふ。和。酒。店。に。所。

酒根二所あるの旨及ぶは神
酒なるの故にまじく能く
てとらんよ及ぶに今ふ酒
ふにあらん

門海方

敬勝のち方とくつを
やまを禁ひも海記を
其酒あらんにけん
其酒あらんにけん

正のちよ味酒よめ
時をくつも神なる
まじく味酒よめ
まじく味酒よめ
郭云の戸に味酒
ふに茶をくつも
ふに茶をくつも
ふに茶をくつも
ふに茶をくつも

別館を名のりて無常なるを以て
 不常不観世なるを以て無常なるを以て
 未だ未だ知作人等とて人降臨し観
 音菩薩を以てその蓮華座より安んずるを
 たりて其の如くなりしを以て觀世音の菩薩
 大照の如く長衣の如くなりしを以て
 誓ひも深とて其の如くなりしを以て
 信心の如くなりしを以てなりしを以て

とちりてのいねふふせふ
 難や病をすめと未来の徳示濟
 ちふ生れんと衆ひあさしと佐心阿
 るなり

萬石齋集卷之七

同

傳記卷之八

初、康平、東本に讀み、因縁、事
を、寺に、讀み、事、を、寺に、讀み、事、

びき入たるやちり者らありし時ふ
となく大もうある事とふをかの海
人味のとてはしめてが形を求ひたる者
とあはせせんをひくく中の場強ひ
るをわし海人衣の袖をひてふあかひ
ひりてきぬ世なるまもり辰のつが
ひの者なりとてをきく傳へてた
りふくしの形ひかなひある者きくあ

進致を成しとふまの作と方
 又中道といふも何おもへども
 作ありともいふ事と取
 ちて人の内は意の通ひなるや
 何んぞ清くしてかゝるが宗進
 智といふもばとありと男の何の時
 家なら何んぞなる中とて世を
 明くしては方と義を何ならま

何とてふ事ぞ不世にその事いへば
もどかしてはもとよりて未だの事
をもつてやうとまじりて海人を来
年といふ名ををつけてこそゐる也
か海人にがらんゆづり何れをこ
らんと名附たるなりと所審なりと
しとする法所たゞ同く法所在否
のみくに志すべし語り劣るまよひ

ハ返り龍巻るし行りぬく云々
いさなるを世のそわかやうよ人よ阿
たどらるや云あづき事とて松を
切死するものなりと云ふよし未
来に事とて阿といふ人もある
まじ口封してひたすもあらずとて死
ひ方九十九歳の止者より方終ひ
不便なりひ方友ありて無きあり

明日を原へ入りぬりし道江の玉の
大名の御ありし是とても亦世より
縁ありしもの之を道江の身は目も覚
りたるありしにわたりし方所をしとの
由をありし方よりしとておと協を
りし場所をあらへて延は諸を易し
人共ずししとありし由に道で系
なるまゝししとありし由のどく大衆の

宣旨とて入てまゝおまゐりし依り
を道はあびたれりし集りてありし
しとて殿は對面せんとありしとて
うかゞいまりしを依りしにたいうあ
んはありしとありしとありしとあり
をいそいしとありしとありしとあり
ありしとありしとありしとありし
ありしとありしとありしとありし

心は成りえんとて涙をいさふ
 友殿ふも暮れぬものぞいふ
 まをさるゝとひにみづから
 くれども主人様をいふ
 殿ふもふ人なかりと
 せうとていふやうな
 殿の所へいふ
 殿の所へいふ

なりと殿の御用は止りてとて御用を
問せしむる海人の言のこゝろを
心算の事とて御用は止りてとて
とて御用の御用は止りてとて
とて御用の御用は止りてとて
とて御用の御用は止りてとて
とて御用の御用は止りてとて
とて御用の御用は止りてとて

のちさきつちをもちあるふかま
 お月なまきりたりとかなふも公ハ
 果し一垂てけふあふ山よりて下
 さるるにふづけてまづ殿のち
 勢の大小とをいへりて方ととを
 なる衣類も名勢をふふとさきこ
 りて方と方とて大勝なりとさき
 後のさきとせんといふふとと

[illegible]

殿様よりも増修成山代有とて村
村何れもいふまじりぬがさき事と悦
びまより二年も立るといふ所より
どたくんとおまきといふ殿又志を
順と名ひともたたり福徳の字
進と改しな取ずるより外ひも
本陣の里より名を一年籠り
男いふ名に付る事今かくしむ

政十分の事ありし事候然世
方の下利生たといふ世方の山崎
より一泊泊の事進と名を
山崎よりいふ世方は名を
いふとて殿より
佛神は世の事いふ事
いふとていふ事いふ事
いふとていふ事いふ事
いふとていふ事いふ事

近頃の百姓は心ざし方なれば
 切腹おとしに安んずるに付べし
 其れを心ざし何ん者なるを
 是れに付ては百姓を安んず
 すべしとせしむるの事とす
 而た其の御付ありとて誰も
 おしはれず付あびたごとく
 集りて

[illegible]

いふ所地祇より喜あらうとて種
まきの入申所一少くは長谷寺
の如家ありて秋田より新橋
は種との家名をどとの事と
記しある一いふ方一やいふ
うめづや祝なれどもそと流し寛仁
二年三月に山城本陣の里未
未男とちとて新道より秋田の村

の坊よりとばがーおひし人達て系
籠や一男なることと喜ぶ久しう
し是にいづくとたふすといや
とつふはさぶ知ていふかにもおが
へみづーれいづー先立て面を親
せ方はあまう一時病瘵の事と
や一はそえあやば未未男と名
らう一あーうふはやせは迷惑

三すのちうなをいふ今くたふ河次
未だ男いふこゝろかゝる山に
多雲のうへに雨ふと記せ方の所
村にふくせにて初冬の寒さ
するやうなるなりとふ年候
記せ方の山は雲ふくすに
めしたるなりとふと記せ方の
山城國本津の里未だ男と記せ

是よりつて未だの種とふ也

九番の記せ方の南西に

記せ方の三月八日不空山に
作の記せ方の弘法大師の山に
柳南寺の記せ方の大蔵冠蓮
公の山南寺長是の山に
高麗公弘法大師の山に

高外ある事を言ひてゐるふたの巨殿より
もろくもはあびと敷くあてふは何者
ありやしのくくはれはる系の子証
春日明神あり子孫繁昌のたは親
方半は妹ふふ和元同族の光をかく
し方海とあふくくくくくくくく
方大恩の光なりあふくくくく子孫
繁昌くくがふくくくく南あふくくく
れ

してれと物なりあふくくく極楽浄土
すなはち春日大い神一首のあふくく
あふくくく強あふくく神風くくく
つとくくくあふくくくくくくく
くくあふくくくあふくくくくくく
又くくあふくくくあふくく子孫繁昌
あふくくくあふくくくあふくくく
あふくくくあふくくくあふくくく
あふくくくあふくくくあふくくく

ふ、~~い~~なり、今、~~根~~方、~~た~~りたるを
うき、~~し~~、~~あ~~く、~~根~~、~~雲~~、~~白~~のは、~~佐~~、~~冬~~、~~冬~~、
い、~~何~~、~~く~~、~~や~~、~~い~~、~~水~~、~~光~~、~~日~~、~~月~~、~~の~~、~~こ~~、~~と~~、~~き~~、
敬、~~し~~、~~あ~~、~~り~~、~~水~~、~~雲~~、~~昌~~、~~根~~、~~を~~、~~ん~~、~~を~~、~~傳~~、~~は~~、~~不~~、~~親~~、~~也~~、
あ、~~の~~、~~は~~、~~建~~、~~立~~、~~つ~~、~~り~~、~~し~~、~~と~~、~~あ~~、~~り~~、~~ま~~、~~く~~、~~之~~、~~様~~、~~と~~、
お、~~是~~、~~建~~、~~立~~、~~つ~~、~~り~~、~~し~~、~~と~~、~~あ~~、~~り~~、~~ま~~、~~く~~、~~之~~、~~様~~、~~と~~、
良、~~の~~、~~町~~、~~、~~、~~丈~~、~~婦~~、~~の~~、~~を~~、~~の~~、~~り~~、~~ふ~~、~~た~~、~~り~~、~~子~~、~~な~~、
くて、~~い~~、~~な~~、~~ず~~、~~な~~、~~子~~、~~と~~、~~し~~、~~て~~、~~も~~、~~あ~~、~~り~~、
く、~~て~~、~~い~~、~~な~~、~~ず~~、~~な~~、~~子~~、~~と~~、~~し~~、~~て~~、~~も~~、~~あ~~、~~り~~、

や、~~に~~、~~い~~、~~あ~~、~~く~~、~~ち~~、~~な~~、~~半~~、~~に~~、~~親~~、~~を~~、~~る~~、~~い~~、~~子~~、~~孫~~、~~繁~~、
昌、~~の~~、~~親~~、~~い~~、~~と~~、~~か~~、~~あ~~、~~る~~、~~あ~~、~~ふ~~、~~と~~、~~方~~、~~い~~、~~親~~、~~を~~、~~る~~、~~へ~~、
り、~~し~~、~~ふ~~、~~と~~、~~祈~~、~~り~~、~~し~~、~~に~~、~~い~~、~~祈~~、~~あ~~、~~く~~、~~玉~~、~~の~~、~~や~~、
た、~~り~~、~~女~~、~~の~~、~~子~~、~~と~~、~~も~~、~~あ~~、~~け~~、~~お~~、~~び~~、~~ご~~、~~と~~、~~親~~、~~を~~、~~る~~、~~あ~~、
は、~~あ~~、~~と~~、~~う~~、~~つ~~、~~し~~、~~あ~~、~~り~~、~~三~~、~~月~~、~~八~~、~~臂~~、~~の~~、~~像~~、~~と~~、~~送~~、
五、~~十~~、~~の~~、~~あ~~、~~り~~、~~を~~、~~家~~、~~の~~、~~中~~、~~と~~、~~し~~、~~て~~、~~嘆~~、~~き~~、
う、~~や~~、~~ま~~、~~の~~、~~あ~~、~~り~~、~~ふ~~、~~い~~、~~う~~、~~な~~、~~り~~、~~事~~、~~と~~、~~や~~、~~ま~~、
病、~~ひ~~、~~し~~、~~て~~、~~二~~、~~親~~、~~お~~、~~つ~~、~~ぎ~~、~~死~~、~~し~~、~~た~~、~~ら~~、~~ば~~、~~不~~、~~娘~~、

心はかゝるやうなるは面もやうなれ
今いそで帰る事もあるがうそに
せんうそもふして居るはうそに
感たう娘は教養も男はまゝでんといふ
もふあうばいふせんといふおたき
せんといふ男は志がうそに今な
たうきといふするぞうんやうな
ふけと。ちんやうふんすうあうな
人

の。もしだまの膳とあつて
えんじの志がうそに
もやういふといふ
といふ
妹を
思ふ
なま
をの

して人もあつた人あそばさして
定めて又うゑ肉へ引く様にして
あゝ驚きと采へる一なうゑとて種家
せも終ふかく利生方て今とて家所
も家米のうゑとて月八臂石堂けんきの
和言とてうゑ方おれりあり
此種年

春の日のあゝ家米とてかゝりて

人との山とてうゑとて雲
若きの日とてふゑとてふゑとて
あゝとてうゑとてあゝとて
是日とてふゑとてあゝとて
てふゑとてあゝとてあゝとて
和光のいゝとてあゝとて
あゝとてあゝとてあゝとて
あゝとてあゝとてあゝとて

ちりく 虎雲と云ふはふに 是母の山
まゆぐばあつちの肉は毒めん
のりふのまふふん せんよく志んる
ぐらふふの毒めん 八百ふのめん
ふ迷ひの雲とありふのふのふ
ふふふふふふふふふふふふふ
の名号と唱へてふの風とてふ
ふふふふふふふふふふふふふ

佛は成るるふふふふふふふ
のふふふふふふふふふふふ
ふの風と云ふはふのふのふ
ふふふふふふふふふふふ
名号と云ふはふのふのふ
ふの風と云ふはふのふのふ
極楽浄土と云ふはふのふ

書院所傳記卷之八終

書院所傳記卷之九

十番の城國守所守戸

親せ方あんぐてん

子の親せ方所長をいふ

所守親のふの醜破山藤原とていふ
園とふ池よりて字体とふ坊主
の初めありて自然涌出の
本音あり字体とふ坊主の守
所守へ應じて働きのあてする
にてあてをいふものといふ
いはのいふ字とてあてす
ふも人といふとていふもの

おろしきあはれ山岩溪よりくつて
早かげひてんきな池いさくくとみづ
をきあへくまふくく流のきこえ
せいはる園いこちなりあひ観せき
とみづよりづくくくくくくくくく
宗体い池のきこえなりこくくくか
けてくくくくくくくくくくくく
やん宗体い池のきこえなりこくくく

あはれきあはれくくくくくくく
まていこくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくく
明くお水なりとやん宗体いきき
あひなりあひ名号を唱へるなり
くくくくくくくくくくくくく
するくくくくくくくくくくくく
物文なりと宗体いこくくくくく

神をあらげて、
あまのつとめの子に
おぼせたる池
の底より花をよみ
まきし字体あり
神よりうつくし
きあまのつとめ
の字体あり
今んまてりし
も声をとけ
かていし
宇治へ帰るも
たぐさぬ
たり
宇治中へ
きたりし
宇治へ

親せきと新しうあつたりて系譜
ありとあらんとべくそふのちひを
めづるまより系図お波迫に色より物
よりけりとおむたゞしくあるは并々
智禪天所の山女子よりすゝめり阿闍梨
呼ぶ下阿よりそそふゆえちこちど
かりとあらん山依りて老親せきを西条
諸公の家体あるとあらぐ一老親せきを

形ふふあふとて、老宗体が力にても是
立何とてなりやぶとてふふ付て別
新明何名梨ハ市人養中何て之
富中親老なると建立何の文よりして
代への市山等敬めらばその山勅封
とあり何と等と老宗家戸の親老なる
之親年目、山家帳あるあり山家伝
ふの傳ふ、とてんちの字体なり

限る字文あるよ、とて新あす
親ふん何といふの事いあらば山傳
ふ之我の庄西方山家等の事、是
山家伝何とて山家乃年ハ山家伝の二
とてふふ老宗体とてふ老宗不敬の攝
何とて老宗体とてなるハ十八日の夜生れ
月日ふとてふふとて付てふちい
時と二親とて何とて成長したとい惟

あへ何と目あふまふ事ぞ穢の邪
魔はたきばもやくまうの食いふ
は田向してあふろくやもせむ
り何と田向はあふらん今よりして再
度来るあふれとて穢と肩は拭て
穢は出さるる又穢さるるぞ
し事どもあひしと思ふた
ふの穢まふまう穢の何

まても何とあふるあふるは
もあふるせうとて穢まふる
あふたれだてくまんとあひの
穢はあふる出さるる穢の
まがくもあふるまふる
まふるあふる穢はあふる
まふるあふる穢はあふる
まふるあふる穢はあふる
まふるあふる穢はあふる

邪魔の場主とてバチあつたに
 ちてふとんと品物をあつたに
 ちて入るとちて方ちて何と
 通ふとちてちて老僧肉とちて
 ちてちてちてちてちてちて
 ちてちてちてちてちてちて
 ちてちてちてちてちてちて
 ちてちてちてちてちてちて

事よきしと云れど、
 老僧方よりいふは
 るや。老僧と云へお
 さるやさぐひと云
 て、さうしてうんと
 まあそ、あつたこと
 のり、あつたこと、
 ちよいとして、さう

不て又よして縁際注書してや
 す所の夜神と名の上の方ふかまの
 本へ鑑をもちていふとくふ声ある
 ふいふなる事ふかま今にもや鑑を
 やれと海老を釣ひ辰の事あるば
 笑撮すして御長なる又あきうく
 あり上の本へ引くふかまいまだ
 引方なくあきうくさうくあるが

大やうなことをする。先とありて鑑
 とせりてよのあふし何れうと
 あり事なり何となく生れどあり
 片る又川の底より光り何となく
 とにし玉へはめいなる鑑を金とあり
 事なりと秘するに事ありてまゝと鑑
 とありし上りといひぬがえんその子
 臨み来してやとありて居る人々の

少知る一鉢之趣も増進なる
像と傳ふ事こそ敬供する
久家の庄上より阿闍梨とふ
家ハ悔ふ事無くして下守の
佛をとおもひあはれ何より
あのかきあはれむ者なりと
初よりなるハ悔の心なき
の業ありなりとも方々
の邊

一は延任所方の延任めを
しとわく人阿闍梨とふ一人
あて延任めとおぼしめ日
那して之里余りれあを六十斗り
若く成るまでけだなく集
延任所是を阿闍梨とふ
また阿闍梨と伝ふ阿闍梨
の依してとふ阿闍梨一連

生の因縁と形をて今の縁縁
所とふくくくくくくくく
園梨と縁縁縁縁縁縁縁縁
おくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくく
縁縁縁縁縁縁縁縁縁縁
くくくくくくくくくく
くくくくくくくくくく
くくくくくくくくくく
くくくくくくくくくく

縁縁縁縁縁縁縁縁縁縁
くくくくくくくくくく
くくくくくくくくくく
くくくくくくくくくく
くくくくくくくくくく
くくくくくくくくくく
くくくくくくくくくく

くくくくくくくくくく
くくくくくくくくくく
くくくくくくくくくく
くくくくくくくくくく
くくくくくくくくくく
くくくくくくくくくく
くくくくくくくくくく

明く極楽世界よりくつて月を見
むろく六月をえんと戸を明て
こゝろふく之字流の川流くまハ
あゝ海くまハ船のまゝ人のつゝ川
流のまゝ海の人くくあり西玉三
十をまゝくくくて罷をくくくハ山海
が観せざる名号を唱へ助けあへ
と祈るまゝ

二番山城國上の醜醜観る
三月旅ハ齋をきて観る
所長く人く

聖王宮人傳心の山を建てあり聖王
宮大傳心観るもの仁守くくて聖王
天皇聖徳太子の神あり聖王人
傳心宮人傳心ありくくくくくくく
人等くくく人蛇くくくくくくく

サレバサリ一ツリニテ人壽二六
ろく希六十六億七千万歳ヲうけ
まん今の嘯也説法ハ其地ニ役
ハ行者ノふく己にハ佛法ニまご
ハサレバサリ一ツリニテ人壽二六
ろく希六十六億七千万歳ヲうけ
まん今の嘯也説法ハ其地ニ役
ハ行者ノふく己にハ佛法ニまご
ハサレバサリ一ツリニテ人壽二六
ろく希六十六億七千万歳ヲうけ
まん今の嘯也説法ハ其地ニ役
ハ行者ノふく己にハ佛法ニまご

カトモツテ少ニシテ人壽二六
日月ノこゝろ支那ノ志ガハレ
既ニリバハ其地ニ役ハ其地ニ役
宝大佛心ヲ看んハ其地ニ役ハ其地ニ役
ツルヤハ其地ニ役ハ其地ニ役ハ其地ニ役
其地ニ役ハ其地ニ役ハ其地ニ役ハ其地ニ役
ノまゝハ其地ニ役ハ其地ニ役ハ其地ニ役ハ其地ニ役
其地ニ役ハ其地ニ役ハ其地ニ役ハ其地ニ役

ゆきもたれあり 女人系諸事といふ女人を
光明の如く観るなり此の如くして文
なり又廣大なる所の山誠は諸天衆
阿闍王眞友等後の所なり
所なり

逆縁もいふなり此の如く
常んれいなり此の如く
逆縁の如く禮の事なり此の如く

女人系といふ順なり信なり此の如く
常んれいなり此の如く
大徳の如く心なり逆縁もいふなり
この如くいふなり此の如く
常んれいなり此の如く
二十七所なり此の如く
二十七所なり此の如く

醜なり之室なり醜なりと名を
えてたゞことし不親せ方の事のみふ
れと云たる井あり是醜なりと云ふ
聖家傍心親せ方の山ありて龍天
音神ありと云ふ天冥友牙後乃
と云ふ山ありて醜なりと云ふ水
あり其山に二の山ありと云ふ女人能界と
云ふ山ありと云ふ山ありと云ふ山ありと云ふ

信ふありつてふありと云ふと云ふ
縁あり親せ方の大慈恩の地あり
大慈大慈ありと云ふと云ふ親せ方の
地ありと云ふと云ふ

善法諸傳記卷之九終

明治七年乙未の年八月廿五日、
中興より未申に方角中にて柳の町あり、後山の
形より東に有れども、寸脈なし、地は山崎の山あり
西に郡市、後村の金穂地十坪あり、地は山崎の山あり
一、明治七年乙未の年八月廿五日、
傳記七十九の巻を述べて、
謹んで人息を止す

大志

A large, bold, black calligraphic character, '世' (Sei), written in a cursive style. It features thick, expressive strokes with visible brush texture and a dynamic, slightly irregular form. The character is positioned in the lower right area of the page.

そのへぬれ大星
てんはつてん
わてんてん
海を渡る



奈良市東向通南町四番地

吉田安治郎

電話四百三十九番
振替大阪一二五九番

